



Vol.33

# テクノロジーと法の未来へ

FACULTY OF GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で分析・解明し、解決策を論理的に構築する、iTL独自の学びに迫ります。



国際情報学部国際情報学科3年  
長崎県立長崎西高等学校出身

みやざき しょうだい  
宮崎 翔大

## 国際ICITインターンシップを通して

生活では絶対に経験できないような刺激的な生活を送ることができました。

### 深まる知見

私が、英語学習に興味を持ったきっかけは80年代のアメリカ映画でした。そんな私にとって数多くの映画の舞台となったカリフォルニアを訪れるというのは長年の憧れであり、一つの目標でした。また、このプログラムの最大の特徴は、世界の先端を行くテック企業に訪問できるという点です。今回は、NVIDIAやAWSなどの日本法人訪問と、GoogleをはじめMetaやSalesforceの米本社を訪問させていただきました。目まぐるしいスピードで変遷していく現代社会を最前線で牽引する企業の方々の話は内容が濃く、視野の広さに圧倒されました。

私が参加した「国際ICITインターンシップ」は、ホームステイとカリフォルニア州立大学イーストベイ校の寮生活が各1週間で構成されていました。

このイーストベイ校での授業も大変有意義で、特に印象に残っているのは元Netflix勤務の外部講師の方の授業です。自身自身がメディア系のゼミに所属しているだけに、こういったコンテンツ産業系の授業は興味深いものでした。Netflixの成り立ちから事業拡大、マーケティングの開拓をはじめとした基本情報から、今のメディア消費の現状やサブスクリプション方式のコンテンツ産業の今後のあるべき姿などを議論しました。この授業が特に心に残っていたため、イーストベイ校での授業最終日に行われたプレゼンでもこのメディアの話をしました。

これらの超大企業の話や大学の授業も素晴らしいものばかりでしたが、一番印象に残っているのは、ジャパンイノベーションキャンパスというスター



米国 Google 本社入口にある巨大なロゴ



サンフランシスコの街並み。坂の下に港がある

トアップ支援をメインとする企業を訪れたときのことです。この施設は現地のアクセラレーターやVC、世界トップクラスの大学・学術機関、とJETRO等行政機関などの産学官が連携し、世界を舞台に起業したいと考えている日本の学生など若い世代を支援することを目的としています。

ここでプレゼンされた起業家の熊谷芳太郎氏の話が強く心に残りました。熊谷氏は1969年、法政大学工学部機械学科を卒業し、三菱鉱業セメントに入社。半年後アメリカに渡り、ジョージア州立大学理数学部へ編入。卒業後はミシンや家電のメーカーである

### おまけ

今年の2月、「国際ICITインターンシップ」に参加しました。アメリカ・カリフォルニア州に2週間滞在するこのプログラムは、現地ならではの生の英語を感じながら、世界を代表するテック企業を訪問したり、現地大学で語学研修や外部講師による講義などに参加したりするものです。2週間という短い期間ではありましたが、普段の大学

Singer へ入社。その後カメラメーカー Vivitar 社の社長などを経て、現在もさまざまなスタートアップ企業の立ち上げに携わられています。Google に 21億ドルで買収された ELOHI の立ち上げにもかかわられており、どれもスケールの大きい話ばかりで圧倒されました。しかしながらその源流であるメンタリティは、自分の普段の生活と比較してもそう浮世離れしたものではありませんでした。「とにかく、動きだすこと。やってみること。日本では失敗は最悪の終末のように忌み嫌われるが、ここ（シリコンバレー）ではそれがスタートラインなのだ」、この言葉に身を突かれたような感覚を味わったのです。何か新しいことを始める時、そこにはもちろんリスクがあります。しかしながら、そのリスクヘッジこそが重要であり、リスクを取らないと、頭ひとつ抜けた到達点にはたどり着けない可能性が大いにあるということです。「起業という大それたことのように聞こえますが、アイデアがあつて、メンバーが集まつて、ではやってみよう、ただそれだけのことです」

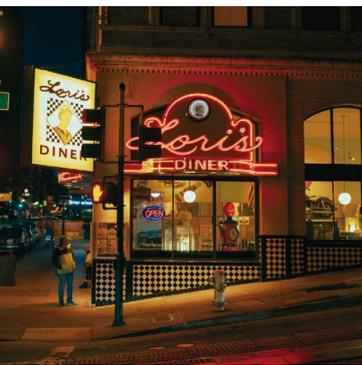


個人的な西海岸のイメージで一番大きい割合を占めているヤシの木

と語る熊谷氏のそのメンタリティこそが、今の私に不足していた部分だったのかもしれない。自分のやりたいこと、新しく始めようかと考えているあれこれには、常に自分自身の「でもうまいかないかもしれない」という足枷が付いていました。しかしまずはやってみよう、というその心意気がなければ何も前に進みません。もしかしたらそこに大きな可能性を秘めているかもしれないものさえ、みすみす自身の手で逃してしまふことがあります。その一歩を踏み出せたところに、一生の糧となる新たな自分が待っているのかもしれない。

### 終わりに

この「一歩を踏み出す」ということの重要さを、身にしみて実感し帰国した私は、今まで敷居が高く手を出しづらいなど感じていた、モーショングラフィックなどを用いた映像制作を始めてみました。やってみるとやはり難しいものですが、自分の作品の中に新たな表現方法の息吹を感じることができて、「もっと早く始めておけばよかつた」と痛感しました。やはり後悔というのはその時になってみないとわからないものです。人生はまだまだ長いといえど、あつという間に過ぎ去ってきます。今後も「まずはやってみる」ことを念頭に、毎日を充実させたいと強く感じました。



街角でみかけたダイナー  
アメリカらしさを端的に感じた

か一歩を踏み出せない、そんな方が今この記事を読んでいるなら、この国際的な選択肢の一つだとお伝えしたいです。日本から出て、現地に行くことでしか得られない知見や感覚があるというのを、まずは自身の肌で感じ、知ってほしいと切に願うばかりです。